授業科目	言語聴覚障害診断学Ⅱ	担当教員	佐々木　勇輝		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	言語聴覚障害学について学習し、評価の方法や援助技術について確認し、実施できる。				
到達目標	言語聴覚障害について系統立てて、考えることができる。 ① 評価・診断の理念　②評価・診断の過程　③統合・解釈				
テキスト・参考図書等	図解　やさしくわかる言語聴覚障害　　著者名：小嶋　智幸　　発行所：ナツメ社				

評価方法・評価基準

評価方法	評価割合(%)	評価基準
試験	50	定期試験（実技試験）、提出物（解説作成）で評価を行う。
レポート	0	
小テスト	0	
提出物	50	
その他	0	

履修上の留意事項	欠席しないこと。

履修主題・履修内容

回	履修主題	履修内容
1	検査演習	実習前オリエンテーション（臨床実習手引き説明含む）
2	検査演習	検査演習（成人・小児）
3	検査演習	検査演習（成人・小児）
4	検査演習	検査演習（成人・小児）
5	検査演習	検査演習（成人・小児）
6	検査演習	検査演習（成人・小児）
7	国家試験対策	検査演習（成人・小児）
8	国家試験対策	模擬試験実施（200 問）
9	国家試験対策	模擬試験問題解説作り（グループワーク）
10	国家試験対策	解説発表
11	国家試験対策	解説発表
12	報告書、計画書作成	臨床実習に関わる評価の報告書作成練習、訓練目標等、ICF に基づく計画書作成練習
13	報告書、計画書作成	臨床実習に関わる評価の報告書作成練習、訓練目標等、ICF に基づく計画書作成練習
14	報告書、計画書作成	臨床実習に関わる評価の報告書作成練習、訓練目標等、ICF に基づく計画書作成練習
15	臨床実習および実技試験対策	実技試験概要説明

授業科目	言語聴覚障害診断学Ⅱ	担当教員 実務経験	箭本尚子 有：■　　無：□	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として 17 年勤務。
対象年次・学期	3 年・前期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅰ	担当教員	佐々木　勇輝		
対象年次・学期	3 年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	30 回	時間数	60 時間
授業目的	・言語聴覚療法に必要な評価の主義を学ぶ ・国家試験の過去の出題や模擬試験を基に、専門基礎分野、専門分野の問題を解いて知識の確認を行う。				
到達目標	・グループ学習を通して効果的な学習理解を進める。				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士国家試験　過去問題　　著者名：言語聴覚士国家試験対策委員会　　出版社：大揚社				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	50	模擬試験および提出物にて評価を行う
	レポート	0	
	小テスト	0	
	提出物	50	
	その他	0	

履修上の留意事項	資料の整理、問題の解き方、ノートやメモのつくり方などを決めて計画的に進める。

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の構成について
	2	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の構成について
	3	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について
	4	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について
	5	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について
	6	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について
	7	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	8	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	9	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	10	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	11	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	12	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	13	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	14	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	15	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り
	16	模擬試験(1)	模擬試験(1)
	17	模擬試験(1)	模擬試験(1)
	18	グループ学習	模擬試験(1)の内容を中心としてグループ学習を行う。
	19	グループ学習	模擬試験(1)の内容を中心としてグループ学習を行う。
	20	模擬試験(2)	模擬試験(2)
	21	模擬試験(2)	模擬試験(2)
	22	グループ学習	模擬試験(2)の内容を中心としてグループ学習を行う。

	23	グループ学習	模擬試験(2)の内容を中心としてグループ学習を行う。
	24	模擬試験(3)	模擬試験(3)
	25	模擬試験(3)	模擬試験(3)
	26	グループ学習	模擬試験(3)の内容を中心としてグループ学習を行う。
	27	グループ学習	模擬試験(3)の内容を中心としてグループ学習を行う。
	28	プリント課題・口頭試問	プリント課題・口頭試問の実施
	29	プリント課題・口頭試問	プリント課題・口頭試問の実施
	30	プリント課題・口頭試問	プリント課題・口頭試問の実施

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅰ	担当教員 実務経験	箭本尚子 有：■　　無：□	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として 17 年勤務。
対象年次・学期	3 年・通年	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅱ	担当教員	佐々木　勇輝		
対象年次・学期	3 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	・言語聴覚士国家試験の概要を理解する。				
到達目標	・国家試験の過去の出題や模擬試験を基に、専門基礎分野の問題を解いて知識の確認を行う。 ・グループ学習を通して効果的な学習理解を進める。				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士国家試験　過去問題　　著者名：言語聴覚士国家試験対策委員会　　発行所：大揚社				

評価方法・評価基準

評価方法	評価割合(%)	評価基準
試験	50	模擬試験・提出物を合わせて評価を行う。
レポート	0	
小テスト	0	
提出物	50	
その他	0	

履修上の留意事項：資料の整理、問題の解き方、ノートやメモのつくり方などを決めて計画的に進める。

履修主題・履修内容

回	履修主題	履修内容
1	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
2	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
3	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
4	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
5	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
6	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
7	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
8	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
9	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施
10	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。
11	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。
12	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。
13	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。
14	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。
15	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅱ	担当教員 実務経験	箭本尚子 有：■　　無：□	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として 17 年勤務。
対象年次・学期	3 年・後期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

<table>
<tr><td>授業科目</td><td colspan="2">言語聴覚障害特論Ⅲ</td><td>担当教員</td><td colspan="3">飯島　治之</td></tr>
<tr><td>対象年次・学期</td><td colspan="2">3 年・後期</td><td>必修・選択区分</td><td>必修</td><td>単位数</td><td></td></tr>
<tr><td>授業形態</td><td colspan="2"></td><td>授業回数</td><td>15 回</td><td>時間数</td><td>30 時間</td></tr>
<tr><td>授業目的</td><td colspan="6">国家試験合格へ向けた総合的な学習を進める。単に国家試験合格を目的にするのではなく、これまで学んできた内容を復習し、今後の臨床活動に結び付けられる理解の機会とする。模擬試験を通して自己の課題分析を行い、個々の学習内容や方法を進めていく。</td></tr>
<tr><td>到達目標</td><td colspan="6">一般臨床医学、ST 専門分野において国家試験レベルの 60％以上（＝国家試験合格水準以上）の知識・理解を有するようになる。</td></tr>
<tr><td>テキスト・
参考図書等</td><td colspan="6">全国模擬試験
プリント課題　全国リハビリテーション学校協会</td></tr>
<tr><td rowspan="6">評価方法・
評価基準</td><td>評価方法</td><td>評価割合(%)</td><td colspan="4">評価基準</td></tr>
<tr><td>試験</td><td>100</td><td colspan="4" rowspan="5">試験の結果を踏まえ評価を行う。</td></tr>
<tr><td>レポート</td><td></td></tr>
<tr><td>小テスト</td><td></td></tr>
<tr><td>提出物</td><td></td></tr>
<tr><td>その他</td><td></td></tr>
<tr><td>履修上の
留意事項</td><td colspan="6">4 年間の総復習となるため、学習範囲が広く復習を繰り返すことが多くなる。疑問は溜めこまず、その場で解消することが極めて重要である。しっかりと学習すること。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">履修主題・
履修内容</td><td>回</td><td colspan="2">履修主題</td><td colspan="3">履修内容</td></tr>
<tr><td>1</td><td colspan="2">【1～15 回】
国家試験対策、模擬試験</td><td colspan="3">国家試験対策として共通分野と専門分野の内容を学ぶ。、
国家試験に準じた内容の模擬試験</td></tr>
</table>

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅲ	担当教員 実務経験	箭本尚子 有：■　　無：□	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として 17 年勤務。
対象年次・学期	3 年・後期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	言語発達障害演習Ⅱ	担当教員	佐々木　勇輝		
対象年次・学期	3 年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	
授業目的	発達検査の実施を通し、臨床で活用できるようにする。小児分野の国家試験問題を解けるようになる。				
到達目標	①　知能検査、発達検査の目的と方法について説明でき、実施できる ②　国家試験問題が解けるようになる。				
テキスト・参考図書等	（参）国リハ式＜S-S 法＞　言語発達遅滞検査マニュアル改訂第 4 版　著者名：小寺富子　発行所：エスコアール （参）言語聴覚士のための臨床実習（小児編）　著者名：深浦順一　発行所：建帛社				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	100	定期試験で評価を行う。
	レポート	0	
	小テスト	0	
	提出物	0	
	その他	0	

履修上の留意事項	欠席しないこと。 小児実習の関係で、検査の順番が入れ替わる可能性あり。

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	知能・発達検査	概要理解、検査の実施
	2	発達検査	概要理解、検査の実施
	3	訓練	概要理解、訓練の実施
	4	知能検査（田中ビネー知能検査Ⅴ、WISC-Ⅳ、WPPSI―Ⅲ等）	検査の実施
	5	知能検査（田中ビネー知能検査Ⅴ、WISC-Ⅳ、WPPSI―Ⅲ等）	検査の実施
	6	知能検査（田中ビネー知能検査Ⅴ、WISC-4、WPPSI－Ⅲ等）	検査の実施
	7	認知機能検査（K-ABCⅡ、DN-CAS 等）	検査の実施
	8	認知機能検査（K-ABCⅡ、DN-CAS 等）	検査の実施
	9	言語発達検査（PVT-R、LC スケール等）	検査の実施
	10	自閉症スペクトラム障害の検査（CARS、FOSCOM、ADI-R、ADS-2、M-CHAT、PEP-3、PARS-TR）	検査の実施
	11	自閉症スペクトラム障害の検査（CARS,FOSCOM、ADI-R,ADS-2、M-CHAT、PEP-3、PARS-TR）	検査の実施
	12	読み書き障害の検査（STRAW-R、LDI-R、URAWSS）	検査の実施
	13	事例検討	事例を用いて、結果について考察する
	14	事例検討	事例を用いて、結果について考察する
	15	事例検討	事例を用いて、結果について考察する

授業科目	言語発達障害演習Ⅱ	担当教員 実務経験	佐々木勇輝 有：■　　無：□	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年勤務。
対象年次・学期	3年・通年	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	構音障害Ⅲ	担当教員	阿部　由美		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	運動障害性構音障害の評価結果の解釈の仕方、具体的なリハビリテーションの実施方法を学ぶ。				
到達目標	運動障害性構音障害の評価結果の解釈ができる。具体的なリハビリテーションが実施できる				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士のための運動障害性構音障害				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	80	定期試験、小テスト、提出物を合わせて評価する。
	レポート	0	
	小テスト	10	
	提出物	10	
	その他	0	

履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	Ｄｙｓａｒｔｈｒｉａのタイプ分類と疾患	
	2	Ｄｙｓａｒｔｈｒｉａの評価法の実際	ＳＬＴＡ－ＳＴを振り返る
	3	Ｄｙｓａｒｔｈｒｉａの評価法の実際	ＡＭＳＤを振り返る
	4	Ｄｙｓａｒｔｈｒｉａの評価法の実際	ＡＭＳＤを振り返る
	5	ことばと音の評価	ＧＲＢＳ尺度について/プロソディについて
	6	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	考え方・訓練立案・方法の説明
	7	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	訓練の実際（グループワーク）
	8	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	訓練の実際（グループワーク）
	9	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	訓練の実際（グループワーク）
	10	治療とリハビリテーション	リハビリテーションの流れ
	11	チームアプローチ	リハビリテーションの中の言語聴覚療法
	12	ＡＡＣ	種類と適応基準、ＳＴとしての役割
	13	ＡＡＣ	種類と適応基準、ＳＴとしての役割
	14	症例検討	ペーパーペイシェントから見る言語聴覚療法の実際
	15	症例検討	ペーパーペイシェントから見る言語聴覚療法の実際

授業科目	構音障害Ⅲ	担当教員 実務経験	阿部由美 有：■　　無：□	言語聴覚士として市内病院にて14 年、訪問看護ステーションにて 4 年、養成校で 4 年勤務
対象年次・学期	3 年・前期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	高次脳機能障害演習Ⅱ	担当教員	北風　祐子		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	臨床実習に向けて、高次脳機能障害の検査を学ぶ				
到達目標	事例を通して適切な検査の選択、実施、結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案、報告書の作成ができるようになる。				
テキスト・参考図書等	（教）標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学　第 2 版　　発行所：医学書院 （参）高次脳機能障害ポケットマニュアル　　著者名：原寛美監修　　発行所：医歯薬出版株式会社				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	100	・試験評価する。
	レポート	0	
	小テスト	0	
	提出物	0	
	その他	0	

履修上の留意事項	検査が多岐にわたるため、それぞれ手技やや内容をしっかり復習し慣れておくこと 検査動画の供覧も実施する

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	知能検査	WAIS-Ⅲ
	2	知能検査	WAIS-Ⅲ
	3	知能検査	WAIS-Ⅲ
	4	知能検査	WAIS-Ⅲ
	5	記憶検査	WMS-R、リバーミード、レイの複雑図形、三宅式（S-PA）
	6	記憶検査	WMS-R、リバーミード、レイの複雑図形、三宅式（S-PA）
	7	注意検査	CAT 、かなひろいテスト、Stroop テスト、TMT
	8	注意検査	CAT 、かなひろいテスト、Stroop テスト、TMT
	9	遂行機能検査	FAB、BADS
	10	遂行機能検査	FAB、BADS
	11	無視検査	BIT
	12	無視検査	BIT
	13	失行・失認検査	SPTA、VPTA
	14	事例検討	事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。
	15	事例検討	事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。

授業科目	高次脳機能障害演習 II	担当教員 実務経験	佐々木勇輝 有：■　　無：□	道内児童福祉施設にて言語聴覚士として 6 年勤務
対象年次・学期	3 年・前期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	社会保障制度	担当教員	中村　さやか		
対象年次・学期	3 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	我が国の社会福祉の状況を知りながら、社会保障のしくみや制度を理解し学び、専門職に必要な知識を持てるようにする。				
到達目標	・社会保障制度の役割や体系を理解する　・社会福祉の概要を対象者別に理解する　・援助技術について学び体験してみる				
テキスト・参考図書等	（教）ナーシング･グラフィカ 健康支援と社会保障③ 社会福祉と社会保障、増田雅暢・島田美喜・平野かよ子 編、株式会社メディカ出版				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	100	定期試験にて評価を行う。
	レポート	0	
	小テスト	0	
	提出物	0	
	その他	0	

履修上の留意事項	社会人として、専門職として必要な事項について学ぶ。わからないことは授業の中で理解ができるよう質問すること。

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	社会保障と社会福祉	社会保障の体系や社会福祉の概要
	2	現代社会の状況	社会保障、社会福祉の歴史的経過や現代社会の状況など
	3	社会保障のしくみ	関連法律や実施体制について
	4	社会保障①医療	医療保障の役割や医療保険制度
	5	社会保障②年金	年金制度の役割や仕組み
	6	社会保障③介護	介護保険の仕組みや内容
	7	社会保障④労働	労働者に関わる保険制度など
	8	公的扶助・手当	生活保護や各種手当について
	9	社会福祉①障がい	障がいの理解や人権について
	10	社会福祉②障がい	障がいに関する制度や法律、状況
	11	社会福祉③児童	児童に関わる制度や法律
	12	社会福祉④高齢	高齢に関する制度や法律
	13	援助技術①	援助技術の種類や方法について
	14	援助技術②	対人援助技術の演習
	15	援助技術②	対人援助技術の演習

授業科目	社会保障制度	担当教員 実務経験	中村さやか 有：■　　無：□	市内専門学校、大学にて社会福祉学等の教育に 17 年に渡り従事
対象年次・学期	3 年・後期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	聴覚障害Ⅲ	担当教員	松山　大輔		
対象年次・学期	3 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10 回	時間数	20 時間
授業目的	1, 2 年次で学んだ聴覚系の知識を再確認し、国家試験に出題される聴覚分野の内容を整理する。 国家試験の過去問題を解けるようになり、国家試験に向けて知識を応用できる。				
到達目標	・耳の構造・機能を理解し、疾患と関連づけて説明できる　・聴覚障害の評価、訓練を理解し、具体的に述べることができる ・聴覚障害のコミュニケーション支援について説明できる　・補聴器・人工内耳の仕組みを理解できる				
テキスト・ 参考図書等	配布資料を使用する。 （参）言語聴覚士テキスト　第 3 版　医歯薬出版株式会社 （参）日本聴覚医学会 編「聴覚検査の実際 改訂 4 版」（南山堂、2017） （参）喜多村 健 編「言語聴覚士のための聴覚障害学」（医歯薬出版、2002）				

評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	100	定期試験で評価を行う
	レポート	0	
	小テスト	0	
	提出物	0	
	その他	0	

履修上の 留意事項	聴覚分野は国家試験の主要な出題分野です。重要用語や内容はしっかりおさえ得意分野にしましょう。

履修主題・ 履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	聴覚障害に関わる解剖・生理	耳の発生、外耳・中耳・内耳 当該分野国家試験過去問
	2	聴覚障害に関わる解剖・生理	聴覚伝導路・増幅 当該分野国家試験過去問
	3	聴覚障害の疾患	難聴のタイプ、中耳炎・メニエール病・老人性難聴など 当該分野国家試験過去問
	4	聴覚障害の疾患	遺伝性難聴 当該分野国家試験過去問
	5	聴覚障害の評価	純音/語音聴力検査 当該分野国家試験過去問
	6	聴覚障害の評価	インピーダンスオージオメトリー、OAE、自記オージオメトリーなど 当該分野国家試験過去問
	7	コミュニケーションを補助するもの	補聴器 当該分野国家試験過去問
	8	コミュニケーションを補助するもの	人工内耳、聴覚補償 当該分野国家試験過去問
	9	視覚聴覚二重障害	盲ろう者のコミュニケーション手段
	10	総合演習	まとめ

授業科目	聴覚障害Ⅲ	担当教員 実務経験	松山大輔 有：■　　無：□	道内急性･回復期病院で言語聴覚士として 5 年間勤務
対象年次・学期	3 年・後期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	非流暢性障害	担当教員	小屋　雄二		
対象年次・学期	2 年 ・ 後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	①吃音症状（中核症状と二次的症状）と進展段階における特徴と心理的状況を理解する。 ②吃音の評価法（吃音検査法）を理解する。 ③幼児期、学童期、成人期の指導・訓練法の概要を理解する。				
到達目標	①吃音の症状や基本的事項を学習し、基本的な知識を習得する。 ②評価法（吃音検査法）を習得する。 ③幼児期から成人期までの各年代での指導・訓練の概要を習得する。				
テキスト・参考図書等	（教）「言語聴覚士テキスト第３版」　著者名：大森孝一、深浦順一編集　発行所：医歯薬出版 （教）「言語聴覚士ドリルプラス　吃音・流暢性障害」　著者名：土屋美智子、大塚裕一編集　発行所：診断と治療社 （参）「エビデンスに基づいた吃音支援」　著者名：菊池良和　発行所：学苑社				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	85	定期試験・レポート・その他を合わせて評価を行う。
	レポート	5	
	小テスト	0	
	提出物	5	
	その他	5	

履修上の留意事項	他者を気にせず、質問を通してより授業が深化する方向で授業に臨むこと。

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	吃音の基礎	定義、発生率、ある女子学生の体験記
	2	「サンデー九」	「サンデー九」北海道言友会（DVD）
	3	吃音の進展	吃音症状（中核症状、二次的症状）、進展段階、CALMS モデル
	4	吃音の原因仮説	歴史的な背景も含めて概観する
	5	吃音の鑑別診断	獲得性吃音（症候性、心因性）、クラタリング
	6	吃音症状分析	吃音症状分析演習
	7	吃音検査法(1)	一貫性効果、適応性効果、吃音検査法第 2 版演習（1）
	8	吃音検査法(2)	吃音重症度検査、吃音検査法第 2 版演習（2）
	9	吃音検査法(3)	コミュニケーション態度調査票、吃音検査法第 2 版演習（3）
	10	保護者支援	保護者と子どもへの支援
	11	社交不安障害	社交不安障害、ペーシングボードの作製
	12	指導・訓練法（1）	楽な発話モデル、環境調整法、リッカムプログラム
	13	指導・訓練法（2）	流暢性形成法、吃音緩和法、統合的アプローチ
	14	指導・訓練法（3）	メンタルリハーサル法、認知行動療法
	15	自助グループ	言友会の活動、吃音者宣言、詩のボクシング（DVD）
	16		

授業科目	非流暢性障害	担当教員 実務経験	小屋雄二 有：■　　無：□	発達支援センター、弱視学級、及びことばの教室、専門学校、聾学校、院内学級にて 20 年余り勤務。
対象年次・学期	2 年 ・ 後期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	補聴器・人工内耳	担当教員	岡﨑　聡子		
対象年次・学期	3 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	聴覚障害者の聴覚補償手段としての補聴器と人工内耳について理解を深める。				
到達目標	補聴器・人工内耳の基本的な構造と機能を理解し、適応や効果判定、フィッティングやマッピング、装用指導に必要な知識を習得する				
テキスト・参考図書等	講師資料を使用				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	100	・定期試験 100％
	レポート	0	
	小テスト	0	
	提出物	0	
	その他	0	

履修上の留意事項	機械が苦手な人は敬遠しがちであるが、何度でも質問をして理解するように心がけること。

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	補聴器の概要	補聴器の種類と仕組み
	2	補聴器の概要	補聴器の性能
	3	補聴器特性装置	補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、特性装置を使った実習
	4	補聴器特性装置	補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、特性装置を使った実習
	5	イヤーモールド	イヤモールドの種類、耳型採型
	6	補聴器のフィッティング	フィッティングの考え方（リニア・ノンリニア）
	7	補聴器のフィッティング	補聴器の適応と選択
	8	人工内耳の概要	人工内耳の原理と仕組み
	9	人工内耳の概要	人工内耳の音声処理方法（音声コード化法）
	10	人工内耳の概要	人工内耳の適応基準と言語聴覚士の役割
	11	人工内耳のマッピング	マッピングの基本操作（T レベル、C レベル）
	12	人工内耳の評価	人工内耳の評価方法（成人）
	13	人工内耳の評価	人工内耳の評価方法（小児）
	14	補聴器・人工内耳のリハビリテーション	補聴器・人工内耳の装用指導（成人）
	15	補聴器・人工内耳のリハビリテーション	補聴器・人工内耳の装用指導（小児）

授業科目	補聴器・人工内耳	担当教員 実務経験	澤田祐一 有：■　　無：□	認定補聴器技能者。札幌・地方の各支店で 17 年勤務。
対象年次・学期	3 年・後期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

<table>
<tr><td>授業科目</td><td colspan="2">臨床実習Ⅲ</td><td>担当教員</td><td colspan="3">佐々木　勇輝</td></tr>
<tr><td>対象年次・学期</td><td colspan="2"></td><td>必修・選択区分</td><td></td><td>単位数</td><td></td></tr>
<tr><td>授業形態</td><td colspan="2"></td><td>授業回数</td><td>200 回</td><td>時間数</td><td>400 時間</td></tr>
<tr><td>授業目的</td><td colspan="6">言語聴覚部門の管理・運営方法を理解し、多職種連携を意識しながら、言語聴覚士としての役割を学ぶ。
これまで学びえた理論や技術、臨床実習Ⅱでの経験を活用し、対象者に対して適切な評価、問題点の抽出、治療プログラムの立案・実施を行う。</td></tr>
<tr><td>到達目標</td><td colspan="6">・医療人としての倫理を意識しながら、関連職種との協調性を構築することができる。　・適切な評価を取捨選択し、問題点を抽出、対象者に合ったプログラムを立案・実施できる。
・対象者に対する適切な評価・治療を実施するだけでなく、対象者に寄り添いながら総合的な力を養うことができる。　・臨床教育者の指導の下、適切なデイリー・報告書の作成ができる。</td></tr>
<tr><td>テキスト・
参考図書等</td><td colspan="6">特に指定しない。
特に指定しない。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">評価方法・
評価基準</td><td>評価方法</td><td>評価割合(%)</td><td colspan="4">評価基準</td></tr>
<tr><td>試験</td><td></td><td colspan="4" rowspan="5">臨床教育者の評価と学科教員の評価を合わせて総合的に評価する。
評価項目（実習施設）
1、医療者としての資質・適性　2、信頼関係の形成　3、適切な評価の選択と実施、分析
4、訓練計画の立案と実施　5、再評価　6、研究的思考
評価項目（学校）
1、実習前準備　2、提出物　3、発表
実習施設 60%、学校 40%　200 点満点中 120 点以上を合格とする。</td></tr>
<tr><td>レポート</td><td></td></tr>
<tr><td>小テスト</td><td></td></tr>
<tr><td>提出物</td><td></td></tr>
<tr><td>その他</td><td>100</td></tr>
<tr><td>履修上の
留意事項</td><td colspan="6"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">履修主題・
履修内容</td><td>回</td><td colspan="2">履修主題</td><td colspan="3">履修内容</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="3"></td></tr>
</table>

授業科目	臨床実習Ⅲ	担当教員 実務経験	松山　大輔 有：■　　無：□	道内急性･回復期病院で言語聴覚士として 5 年間勤務
対象年次・学期		担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	音声障害	担当教員	北風　祐子		
対象年次・学期	3 年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15 回	時間数	30 時間
授業目的	言語聴覚士に必要となる音声障害の病態を理解し、的確な評価方法、適切な指導・訓練について学ぶ。				
到達目標	・喉頭の解剖における部位の名称と働きを説明できる。　・呼吸生理と発声メカニズムを説明できる。 ・音声障害の発生原因および症状を説明できる。　・評価、指導、訓練について理解する。				
テキスト・参考図書等	（教）言語聴覚士のための音声障害学　医歯薬出版				

評価方法・評価基準

評価方法	評価割合(%)	評価基準
試験	100	定期試験で評定を行う。
レポート	0	
小テスト	0	
提出物	0	
その他	0	

履修上の留意事項

・積極的に声を出し、自分のからだがどんな風に動いているのか感じること
・配布プリントおよび教科書の予習復習をすること

履修主題・履修内容

回	履修主題	履修内容
1	声の特性と機能・調節	声に含まれる情報、声の可変性
2	声の特性と機能・調節	声帯振動
3	声の特性と機能・調節	発声の生理とその調節
4	声の特性と機能・調節	発声の生理とその調節
5	声の特性と機能・調節	グループワークを基に発声の解剖生理をまとめる
6	音声障害の発生メカニズムと分類	器質的病変に基づく音声障害
7	音声障害の発生メカニズムと分類	声帯の運動障害に基づく音声障害
8	音声障害の発生メカニズムと分類	その他の音声障害
9	音声障害の発生メカニズムと分類	グループワークを基に各病変による音声障害をまとめる
10	音声の検査・評価・診断	検査の種類、鑑別診断
11	音声障害の治療	治療法の種類、衛生指導
12	音声障害の治療	音声訓練の目的・種類・適応
13	無喉頭音声	代用音声
14	気管切開患者への対応	気管切開
15	音声障害者の社会復帰	社会復帰の問題点、言語聴覚士の役割

授業科目	音声障害	担当教員 実務経験	北風祐子 有：■　　無：□	道内病院で言語聴覚士として 20 年以上勤務し、養成校にて 15 年以上勤務
対象年次・学期	3 年・前期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		

授業科目	関係法規	担当教員	佐々木　勇輝		
対象年次・学期	3 年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10 回	時間数	20 時間
授業目的	言語聴覚士に係る法律について学ぶ。				
到達目標	①　言語聴覚士として必要な法規について理解する。 ②　言語聴覚士と関係の深い職種について知識を得る。				
テキスト・参考図書等	（教）言語聴覚士テキスト　第 3 版　著者名：大森孝一他　発行所：医歯薬出版				

評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準
	試験	100	定期試験により評価を行う。
	レポート	0	
	小テスト	0	
	提出物	0	
	その他	0	

履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。

履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容
	1	関係職種と法規	リハビリテーション領域のなかの言語聴覚士法
	2	関係職種と法規	言語聴覚士法
	3	関係職種と法規	言語聴覚士法
	4	関係職種と法規	医事法規(1)医療法
	5	関係職種と法規	医事法規(2)医師法、歯科医師法(3)保健師助産師看護師法
	6	関係職種と法規	関係職種(1)社会福祉士・介護福祉士
	7	関係職種と法規	関係職種(2)特別支援教育
	8	関係職種と法規	関係職種(3)特別支援教育
	9	関係職種と法規	その他(1)法の体系、個人情報保護法
	10	関係職種と法規	その他(2)法の体系、個人情報保護法

授業科目	関係法規	担当教員 実務経験	柿崎貴浩 有：■　　無：□	市内精神科デイケアに 10 年、精神科病院に 1 年、老健施設に 1 年勤務
対象年次・学期	3 年・後期	担当教員 実務経験		
授業形態				
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		
		担当教員 実務経験		